

互いの人権意識を高め合う子どもたちの姿をめざして — 確かな子ども理解に基づいた学級づくりの中で —

石原 峰子

これまで、わが国においても、人権尊重社会を実現するためにあらゆる場において人権教育および人権啓発がなされてきた。しかし、現在もなお、子どもたちの豊かな学びや可能性を十分に保障できているとはいえない状況が報告されている。このため、学校教育においても、それまでの人権教育の在り方をふり返り、さらなる充実を求める機運が高揚してきたといえる。

本研究では、互いの人権意識を高め合う学級とはどのような学級なのか、また、自他を大切にす実践的な態度とはどのようなにはぐくまれるのかを探りながら、「学級づくり」を通じた人権教育の在り方を追究したいと考えた。

第1章 人権教育と学級経営

第1節 学校における人権教育

学校における人権教育は、子どもたちが、自分や他人をかけがえのない存在としてとらえ、問題解決のために行動できる力を養うことを目的として実践されている。

こうした人権教育は、学校のすべての教育活動を通して行われるべきであるが、学級は、その人権教育を成立させる基盤となる学習環境である。子どもたちは、そこで、日々、様々な人と関わりながら学び、生活し、その経験を通して人権感覚を育てていくからである。今一度、学校教育の中の「学級づくり」という教育活動において、人権教育の在り方を問い直さなければならない。

第2節 確かな子ども理解に基づく学級づくり

まず、①「学習の場」や「生活の場」での行動や態度、②人権感覚、といった二つの視点でアンケートを作成し、子どもたちの人権意識の実態をとらえることにした。また、一人一人の回答と学級全体の傾向とを同時に見るできるように工夫した集計用紙を作成した。(図1)そして、その集計結果を分析・考察することで、学級全体と焦点を当てた子どもたちに対する取組や指導を計画した。

また、子どもの意識の実態が変容していくことを踏まえ、実態把握と取組の改善をくり返して

		学習について				要素
対人	〇月	①いつもよく	②だいたいときどき	③あまりしない	④ぜんぜんしない	
自分	1 あなたは、授業に集中し、熱心に取り組んでいますか。	イ	ア	カ		学習態度 教材研究 内容理解
	2 あなたは、授業の内容が分かりますか。	イ	ア	カ		

図1 アンケート集計用紙(一部)

くPDCAサイクルを基本として「学級づくり」を実践していくことにした。

第2章 二つの場での学級づくり

第1節 学習指導の実践

「学習の場」アンケートの回答をもとに、日ごろの態度や背景を合わせて考察すると、子どもたちの実態と課題が明確になる。それに担任の願いを合わせて、「学習の場」の具体的な取組を計画・実践した。実践協力は第4学年の学級である。

国語科の学習指導では、前期に「白いぼうし」、後期に『伝え合う』ということという教材や単元で、人権感覚育成を意識した授業に取り組んだ。

協力学級の実態を踏まえて、国語科の指導目標と共に、人の気持ちを想像したり人の考えに耳を



図2 話し合い活動

傾けたりする態度を育てることを人権感覚育成に関わる指導目標とした。そのため、学習指導案には、「人権感覚育成に関わる」留意点を明記し、学習活動では「話し合い活動、協働学習」を多くの場面で取り入れた。(図2)

このような授業展開により、多くの子どもたちが、「伝え合い」は双方が心を働かせたやり取りであることを感じ取っていたようである。10月に行った三回目のアンケートでは、「学ぶ喜び」を感じていると回答した子どもたちも増えていた。

第2節 生活指導の実践

担任は子どもたちに、自分に自信をもち、互いに切磋琢磨し合える関係になってほしいと望んでいた。そして、5月のアンケート結果からも「生活の場」で重点的に取り組む必要を感じたのは、「人間関係づくり」であった。そこで、今回取り組んだのは、図3のように、a:子ども同士の関係に、b:直接個々の子どもに、c:保護者と子どもと

の関係に、という三方向の働きかけである。この取組に対する子どもたちの変容を、三人の児童を中心に見ていくことにした。

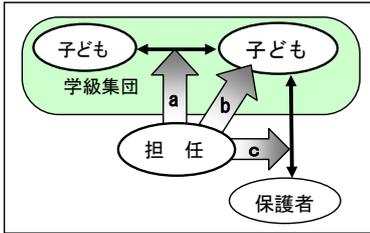


図3 人間関係への働きかけ
a, b, c それぞれの取組と、子どもたちの様子は次のようであった。

a: よりよいものを目指して切磋琢磨したり、知恵や力を出し合ったりする経験をさせることで、子ども同士が互いのよさを認め合える関係をつくる

少しずつだが、子どもたちには互いのかかわりを深めていく様子が見られるようになった。子ども同士の関係づくりに働きかけの中で、一人一人の内面は確実にはぐまれていると考えられた。

b: 個別の事情や内面を的確に把握して、チャンスを見逃さずに直接その子どもにかかわることで、子どもと担任の信頼関係をつくる

学級全体も、三人の児童も、担任に思いを伝えようとする態度が見られるようになった。個々の内面を思いやりながら言葉をかけることで、子どもは心を開き信頼を寄せるのではないだろうか。

c: 家庭内のコミュニケーションに働きかけることで、子どもと保護者とのふれあいを豊かにし、担任と保護者との信頼関係をつくる

学級便りや家庭訪問を通じて「子どもの姿」を積極的に伝えることを心がけた。保護者にとっても、担任の願いを知り、指導の意図を理解した上で子どもとふれあう手がかりにできるだろう。

第3章 人権意識を高め合う子どもたち

第1節 子どもの人権感覚をとらえる

「クラスづくりアンケート」の集計結果から子どもたちの人権感覚の様子をとらえ、日常の行動や態度とどのようにつながるのかを探った。

まず、「自他の価値を肯定し尊重する意志やそのための能力」に対する回答を数値化すると、「自己」に対する肯定感については高い数値を示したが、存在感については比較的低い数値となった。また、「他者」の価値に対する数値はやや高くなった。相関係数によって、日常の行動・態度と関連しているのを見ると、「自己」や「他者」の価値は、他者から承認・賞賛されていることや自身が学級での責任を果たすことと強く関連していた。

次に、「価値を擁護しようとする意志やそのための能力」の中で低い数値だったものは「関係づ

くり」の《主張》《自制》であった。相関係数で見ると、保護者や他の子どもとのコミュニケーションの実態と関連が強いことを示していた。

そして、「人権が尊重される環境」にも、他者からの承認・賞賛や交友関係が関連していることがわかった。(図4)

学級の中で、自他の価値を肯定し擁護しようとする意志やそのための能力をはぐくむには、自己と他者が互いに「傾聴」「承認・賞賛」し合う温かい人間関係や、安心して自己表現できる環境をつくること

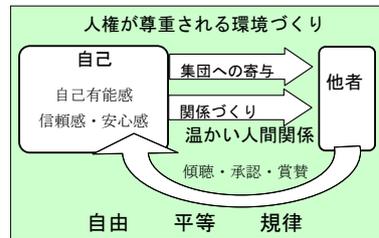


図4 人権教育の成立基盤
前提となるのではないだろうか。

第2節 人権を認め合う環境をつくる

前節の分析・考察を踏まえ、人権感覚をはぐくみ、人権意識を高め合う子どもの育成をめざした「学級づくり」の在り方を考えてみた。

図5は、研究協力学級でのアンケート要素「自己価値の肯定」に対する回答をグラフにしたものである。5月から10月にかけて、“自分がクラスの中の一人として確かに存在している”という感覚が高まった様子が見取れる。子どもの対人意識を高め、それを普遍的な人権感覚に育て、さらに温かい態度として現れる

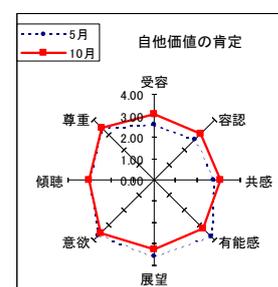


図5 「価値の肯定」の変容

ようにするためには、授業という「学習の場」での人権教育が、さらに意識されなければならないのではないだろうか。

また、本学級の担任は、三人の児童の変容に注目しながら、学級生活の中に「伝え合う」ルールをつくったり、「聴き合う」リレーションを高めたりすることを心がけた。こうした指導を一貫させたことが、学級に対する安心と信頼を感じさせ、個々の存在感を高めたように思われる。

一人一人の内面に人権感覚の種を蒔きながら、同時に、学級の中に安心できる人間関係をはぐくんでいく。「学習の場」や「生活の場」で、互いの人権意識を高め合うような指導や関わり方を意図的に行っていく。このような視点で「学級づくり」をすることが、人権教育を成立させる基盤をつくることではないかと考える。